
龍・仮面ライダー 電王 クライ・マックス・ナイトメア

鉄槻 緋色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

龍・仮面ライダー 電王 クライ・マックス・ナイトメア

【Nコード】

N2286J

【作者名】

鉄槻 緋色

【あらすじ】

「あけましておめでとうございます！」「甘いですよ良太郎くん。新年は、。。を見なければ始まりません！」「え？なに？よく聞こえ」怒涛のように粘っこい暗闇に世界は覆い尽くされてしまった。「……愛しているの。愛しているのよ」呪いのように侵食するフレバーが闇にケミカルなカラーの渦を描き出した。「う、うそだ！？どうしてこんな……」「バカモモ！」がすっ！熱い拳が良太郎の頬を抉る。「え！？ちが！？」「バカモモ！」がすっ！「バカモモ！」がすっ！「バカモモ！」がすっ！「バカモモ！」がすっ！「バカモモ！」がすっ！「バカモモ！」がすっ！「バカモモ！」がすっ！「ち

よ！？ハナさん！？ぼく良太ろ」「じゃあ良太郎！」「がすっ！」「ええええ！？」愛の鉄拳制裁は合わせ鏡のように無限に続く。襲い掛かる不条理に、もはや抗う術はないと言うのか！？否！今年のクライマックスの扉を解き放て！世界を歪めるのが愛ならば、それを正すのもまた愛なり！故に寵・仮面ライダー 電王！クライ・マックス・ナイトメア！

デンライナーにやって来た良太郎は、開かれた自動ドアの向こう、食堂車室内のその光景に目を剥いて驚愕した。

「ちょ、え！？ ちよつと!？」

各テーブルに一人ずつ、中身をブチ撒けたコーヒークップを転がして悶絶、あるいは昏倒しているイマジンたち。一人だけ一見様子が変わらないのは普段の居眠りと見分けが付かない金色の巨漢・キンタロスだけだ。

「ねえ！？ ちよつと!？ リュウタロス!？」

一番手前のシートに半身を投げ出して昏倒している小柄な紫の竜人・リュウタロスの肩を揺するが、反応しない。

「ウラタロス!？ キンタロス!？」

テーブルに突っ伏す青い亀甲模様のイマジンも、腕組みしてシートにどっかりと座すキンタロスも無反応。

「モモタロス!？ ねえ!？ 起きて!？ しっかりして!？」

そしてシートにひっくり返っている赤鬼にすがりついて揺さぶるも、結果は同じであった。

「……なにが……いったい何が、どうして、こんな……」

あまりの惨状に、よろよろと立ち上がり後退った良太郎は、そのカウンターに向き遣った。

「ねえ!？ ナオミさん、ハナさんてうわあああ!？」

振り向いた良太郎は、その異常な光景に再び絶叫した。

「……おいしいって……みんな、おいしいって……言ってよ……おいしいって……」

カウンターの向こうにいる身体にフィットした制服を纏う少女・ナオミは、なにやら病んだ調子でぶつぶつと意味不明の呟きを繰り返しながら、一心不乱に目の前の鍋に突っ込んだ匙を掻き回していた。中身は、およそ鍋の用途に適う色をしていない。

「……イマジンなんか……イマジンなんか……イマジンなんか……イマジンなんか……イマジンなんか……イマジンなんか……」

一方、そのナオミの傍らに立つ長身の少女・ハナも、呪詛めいた声音で同じ言葉を延々と繰り返しながら、自らが脇に抱える巨大な籠から丸のままのトウガラシを鷲掴みにしてはナオミが掻き混ぜる鍋の中に放り投げ、鷲掴みにしては放り投げ、鷲掴みにしては放り投

げている。

二人ともなぜか目の辺りが暗く陰り表情が全く読めなくなっている。

「……な、ナオミさん、ハナさん……」

もうダメだ。何か取り返しのつかない事態にまで陥っている。この絶望的状况を前に、無力な良太郎ひとりでいたい何ができると言っのか。

「いまこそ。良太郎さんの力が必要な時です。」

「オーナー!？」

静粛に開かれた自動ドアからゆつたりと現れた中年男性が、扁平な顔に厳かな雰囲気を見せて宣った。

「あ、あの、僕はどうすれば……」

「新たなイマジンが現れました。良太郎くん。あなたの出番です。」

言って、オーナーは取り出したパスに赤いチケットを挿し入れて閉じ、それを良太郎に差し出してきた。

「え？ でもあの、み、みんなが……」

「さあ早く。」

ぐわ、と扁平な顔面が拡大した気がして沈黙する良太郎。

「今の良太郎くんは、まだ一人ぼっちではありません。さあ。」

その真意は分からないが、厳かな顔で告げるオーナーに従い、パスを受け取った良太郎は意を決してベルトを抜き出し、勢いを付けて腰に巻き付けた。

さらに赤い異形の携帯電話・ケータロスを取り出して展開し、ベル

トバックル部に取り付ける。

「変身！」

叫び、パスをベルトのバックルに振り抜くようにかざした。

《ライナー・フォーム。》

ベルトが認証を告げ、良太郎の身体に殺到した光の粒子が瞬時に黒とシルバーの扁平なボディスーツに変じ、続いて周囲に出現した機械部品が次々と身体に装着され装甲を成してゆく。

やがて現れた赤い甲冑は、さながらこの「時の列車」デンライナーを模した仮面を纏い、移動ステーション「キングライナー」を模した胸郭を身につけた、良太郎自身のオーラによって形成され顕現した『仮面ライダー 電王・ライナーフォーム』。

オーナーが装填した特殊チケットの効力により、良太郎はデンカメソードを介さずに直接ライナーフォームに変身したのだ。

『つて、オーナー。僕が「一人じゃない」つて、どういう意味ですか？』

もはや食堂車の面々は死屍累々。戦闘技能に疎い良太郎だけではイマジン退治は手に余る。

「わたしが、います。」

『へ？』

背後のオーナーの言葉を聞き返す前に、オーナーがいきなりライナーフォームの背中にお辞儀をするように顔を突っ込んだ。

『うひゃ！？』

まるでイマジンの憑依のように身体を透過されたのだ。

すると、良太郎の制御を離れた右手が再びパスを取り出し、それをベルトバックルにかざした。

《オーナー・フォーム。》

ベルトが有り得ない認証を告げ、それと同時にライナーフォームの背中から生えていたオーナーの首から下が渦を描いて体内に吸い込まれてゆく。

するとどこからともなく黒い瀑布が吹き出しライナーフォームの身

体を包み込んだ。

それは胸に肩に腕脚に巻き付くと、ライナーフォームの赤い甲冑に漆黒の装甲を追加し、そして黒い胸郭のど真ん中によつきりと扁平な中年男性の顔、オーナーの顔面が生えてきた。

これが絶望的危機を救う為に発現した電王の緊急形態『仮面ライダー 電王・オーナーフォーム』の姿。

良太郎の意識が脇に追いやられたオーナーフォームは、マントをなびかせ軽やかにゆったりとその場で一回転すると、人差し指をこめかみに添えて呟いた。

『最初に言っておきます。この頭の顔は、飾りです。』

『うつつ……ごめんなさい、役立たずで……』

ツツコむ気力も失せた良太郎は、素直に涙に暮れていた。

虹色に揺らめく空の下。

モニユメント・バレーのごとく砂と岩ばかりの荒野をゆくデンライナーの前方に、異様な姿のイマジンが見えてきた。

『とつつ。』

後ろ手に組んだ直立の姿勢で跳躍したオーナーフォームは、そのイマジンの数メートル手前に膝を僅かに曲げただけで静かに着地した。遅れて舞い降りるマントの裾。

『さあ。これが我々の敵！』

『ってオーナー！？ ちょっとデカ過ぎません！？』

意識の奥で良太郎が喚く。

そのイマジンは、水色の円錐形の胴体を持ち、猛禽のような腕脚を生やし、巨大なナスに一つ目を埋め込んだ頭部でこちらを睥睨していた。

その身の丈、目算で約十メートル超。

『これは『ニューイヤーマジン』。新年が訪れる度に、人々が思い描く行く年来る年が具現化した存在。こうして毎年、年に一回出現するのです！』

『いやもつ、なにがなんだか』

『さあ！新年の脅威、わたしが倒して見せます！とうっ！』

言って跳躍したオーナーフォームは、ニューイヤーマジンの胴体に華麗なパンチやキックを次々と浴びせてゆく。

『ーーーーー！？』

その威力に大きく仰け反るニューイヤーマジン。

だが、仰け反った体勢を戻す勢いに載せて吹き出した、何だか良く分からない怪光線が着地ざまのオーナーフォームを直撃した。

『むっむっむっ！？』

間一髪、マントで己が身を包んだオーナーフォームはその威力を完全防御した。

『効きませんっ！』

ばっ、とマントを翻し、オーナーフォームはベルトの両側に提げている装備、デンガツシャーを引き抜くと次々と直列に接続してゆく。そしてどこからともなく取り出した「五本目の」パーツを四基で構成された棒杖の尻に横にして接続し、形五基で形成された長大なT字型のそれを振りかざして構えた。

《デンガツシャー・ステツキモード。》

『ふんっ！』

疾く走り、オーナーフォームはニューイヤーマジンの直下へ飛び込むと、イマジンの巨大な両足をステツキモードで一閃した。

『ーーーーーッ！？』

苦鳴をあげてよろめくイマジン。

オーナーフォームは続けざまにニューイヤーマジンの身体を駆け登り、各所に痛撃を叩き込みながら頭頂を飛び越えると、落下の重量を載せてイマジンの脳天を一撃した。

『ーーーーーッ！？』

あえなく転倒するニューイヤーマジン。

着地したオーナーフォームは間髪入れずにデンガツシャーを分解し、淀みなくアックスモードに組み上げた四基のガツシャーの柄尻に、

五本目のパーツを今度は直列に繋ぎ合わせた。
すると、ガッシャーの先端に展開構成される大きくたわんだ楕円形のオーラブレード。

《デンガッシャー・スプーンモード。》

そう。それはまごうことなき巨大なスプーン。

『……え？ オーナー、これって……』

『さあ。とどめです。』

良太郎の意識の疑問には答えず、オーナーフォームは取り出したパスをベルトバックルの前にかざした。

《フルチャージ。》

『ぬんっ！』

パスを放り捨てたオーナーフォームは裂帛の息吹と共に電光が迸るスプーンモードを目の前の地面に突き立てた。

その電光は地面を一直線に走り、今ようやく立ち上がったニューイヤーマジンの足元に直撃すると、それは瞬時にイマジンの巨体を包む光陣を描き出し、そこから天に向け一条の光芒を吹き出した。

『わあ！？ なんですかあれ！？』

『さあ。わたしのクライマックスです。』

不敵な笑みを含んだ声で告げたオーナーフォームは、今や光の円筒に閉じこめられ身動きのできないニューイヤーマジンの足元に駆け込んだ。

そして踵側へ迅速に回り込むと、オーナーフォームはスプーンモードを真下に構え、猛然と地面を掘り始めたのだ。

『うはははははははははははははははははははははは！』

それはもう凄まじいスピードで掘削を続けるオーナーフォーム。突き刺す体勢と掻き出す体勢で上体が分身して見えるほどの速度で地面は挟れてゆき、オーナーフォーム自身もそれにつれ地中に下降してゆく。

そして足元を大きく挟られた、ニューイヤーマジンを閉じこめた光の円筒はやがてバランスを崩し、後方へと傾いてゆく。

『オーナー！？ 危ない！？』

『ははははははとうっ！』

一瞬早く穴から飛び出したオーナーフォームの背後で、光の円筒が轟音と共に倒壊し、中に閉じこめられたニユーイヤーマジンごと大爆発を起こして粉々になり光の粒子と化して消滅してしまった。

これがオーナーフォームのフルチャージアタック《チャーハンフラッグブレイクダウン》。

脱出の勢いで宙を舞うオーナーフォームは、垂らした両手の甲を胸の顔面の両頬に添えて飛翔していった。

『ところで良太郎くん。』

『……なんですか？』

猛然と立ちこめる土埃の中、着地したオーナーフォームはあっけらかんと告げた。

『ちよつと全開で頑張りましたので、わたしが離脱した途端、良太郎さんの身体はこれまでの負荷によって地獄の激痛に見舞われますので御了承ください。』

『御了承できませんよそんなの！？』

『ちなみに、横綱十杯分の衝撃です。』

『なんですかその換算！？ どんだけの威力なんですか！？ ちよつと待って！？』

『では、よしなに。』

『うわあああああ！？』

オーナーの憑依が解ける気配を察した瞬間、良太郎は襲いかかるかもしれない激痛の恐怖に悲鳴をあげた。

「あああああああつ！？」

そして良太郎は跳ね起きた。

「……、あ、あれ？」

辺りの光景は、蒼い暗闇に包まれた自分の部屋。

自分で跳ね飛ばした布団に気付き、良太郎は寒気に身震いしつつも安堵の溜め息を吐いた。

壁には掛け変えたばかりの一月のカレンダー。

「……ああ……なんだ。夢か。……嫌な初夢見ちゃったなあ。今年も不運が続きそうだ……」

「ゆめかな？」

そこへ、耳に直接肉声が聞こえてきた。

（後書き）

あけましておめでとうございます。作者です。
新年早々のつけからこんなで大丈夫か自分。

この作品で一番悩んだ事は、タイトルの頭につける「ちょう」の字の選定です。

第二候補は「弔」だったんです。良かった。現タイトルになって、やっぱり好きですから。愛しているのよ。

奇しくも「デイレイドマスカークレイド」が「電王の世界編」で年をまたいだこのタイミングでコレですが、引き続き今年も宜しくお願い致します。

……宜しく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2286j/>

寵・仮面ライダー 電王 クライ・マックス・ナイトメア

2010年10月10日05時52分発行